かくて人は、星へ / Ad Astra by nymphxdora ほか

ポット@翻訳

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハリー・ポッター原作最終巻、最終決戦後の話です。読み切り作品。

許可を得て下記の作品を翻訳したものです。

Ｔｒａｎｓｌａｔｉｏｎ　ｏｆ　”Ａｄ　Ａｓｔｒａ”　ｂｙ　ｎｙｍｐｈｘｄｏｒａ　ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｆａｎｆｉｃｔｉｏｎ．ｎｅｔ／ｓ／１０６１３０３４／１／Ａｄ－Ａｓｔｒａ

”Ｉｃｉｃｌｅｓ”　ｗｒｉｔｔｅｎ　ｂｙ　ｎｙｍｐｈｘｄｏｒａ　ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｆａｎｆｉｃｔｉｏｎ．ｎｅｔ／ｓ／１０５８０７９８／１／Ｉｃｉｃｌｅｓ

目次

かくて人は、星へ／Ad Astra by nymphxdora　1
氷柱／Icicles by nymphxdora　8

かくて人は、星へ　／　Ad Astra by nymphxdora

魔法界の祝祭はつづく。　無理もない。　恐怖におびえずに暮らすことができた時代を覚えている魔女や魔法使いは多くない。襲撃されることも、不吉な前兆のようにして自宅の上空に浮かぶ、恐ろしげな骸骨から這いだして牙を見せるヘビに迎えられることも、恐れる必要がない時代を。　新聞が嘘と虚偽だけで固められていない時代、信頼できる大臣がいる時代を。唯一の希望が偽物でなかった時代を。

ハーマイオニー・グレンジャーは祝祭を受けいれられない少数の人々に属していた。花火を見れば一瞬で、彼女の精神はホグワーツの戦いへと舞い戻る。あるいは、禁じられた森で攻撃を避け、戦い、生きのびようとしていた時へと。

彼女は生きのびた。だが、あまりに多くの人々が死んだ。　死の臭いが立ちこめるなかで、どうして祝福ができようか。

禁じられた森の入り口近くの草地に最初に到着したのは、彼女だった。濡れた草の上にブランケットを敷いて座り、彼女は待った。待つあいだ、空を見つめた。　夕暮れが足早に訪れ、星が見えるようになった。はるか遠くで、小さな宝石たちが空に輝いた。

自分の知っている星々の名前を唱えたが、むしろ知らない星々のほうに、注意を引かれた。

昔、母が――モニカ・ウィルキンズになってしまう前の、母が――教えてくれた古い話を思いだす。　人は死んだあと、星々のなかで永遠に生きるのだ、と。　彼女は名もなき星々を見上げ、どれがフレッドで、どれがリーマスで、どれがラベンダーだろうか、と思った。　心のなかで彼らの場所を決め、星座と物語を思い描いた。　いつかみな、伝説の一部になる。

彼女は心のなかに虚ろな痛みを感じた。　友人、家族、自分の失われた子ども時代を思って胸が痛んだ。　結局、これほどまでの犠牲の意味はあったのだろうか。　ヴォルデモートは潰えた。彼女の名前は歴史の本に載る。　だがその過程で、自分自身を失ってしまったのではないか？

次に、赤ん坊のテディを両腕で抱いて現れたアンドロメダの姿を見て一瞬、ハーマイオニーは戦慄した――その容姿にあまりによく似たベラトリックスという女には、少しばかり因縁がある。　最初、アンドロメダのことを、ハーマイオニーはいくらか嫌っていた。アンドロメダは加勢しなかったから。彼女たちを助けてくれなかったから。けれどもその頬に涙の跡が、目に苦悩があるのを見て、おそらく一番大きな打撃を受けたのがアンドロメダだったのかもしれない、と気づいた。　死喰い人たちに全てを――

夫、娘、義理の息子を――奪われたのだから。

ハーマイオニーはアンドロメダを、古い親友のようにして抱き寄せた。そうして、涙が目の端から滲み出たのに驚いた。

ウィーズリー家の面々が、離れた丘の上を越えてくるのが見えた。団結しながらも散り散りに見えた。赤髪の姿が一つ、足りない。ジョージはいつもの笑いに代えて、絶望の表情をしていた。ハーマイオニーはあの双子が片割れだけでいるのを見た記憶がなかった――ジョージは残忍に二つに切り裂かれたかのようだった。

ロンはハーマイオニーに近づくと、彼女を自分のほうに引き寄せた。ハーマイオニーはいつもの彼のリンゴとシナモンの匂いを嗅ぎ、久しぶりにほっとできた気がした。その彼も彼女を置いて星々へと去り、記憶の欠片となってしまわないようにと、彼女は固く抱き返した。

モリーとアンドロメダは二人とも泣いている。抱き合って、おたがいの死んだ子どもたちのために泣いている。ハーマイオニーはビルとフラーがそれを見ているのに気づいた。ビルがフラーのお腹に、守るように手を当てている。それまで膨らみを見た覚えがなかったのでロンに尋ねてみると、彼女の想像どおりだ、とロンはうなづいた。

戦争が終わっても人生は続くのだ。自分の人生もそうであればいいのだが、悲哀と苦悩を無限に繰り返すところで止まってしまっている気がした。

だんだんと、ほかの騎士団メンバーも到着した。 マクゴナガルは、お気に入りの緑色のローブのままだった。その生地にはかすめた呪いによる焼け跡がちらついている。

キングスレーは険しく皺をよせた表情で、いつもの紫色のローブではなく、地味な黒を着ていた。 ダング、ディグル、ハグリッド、フィッグ、ドッジ、アバーフォース……残りのメンバーを探してハーマイオニーは辺りを見回したが、残りのメンバーはもういなくなってしまったのだと、気づいた。

ホグワーツの生徒と教師も皆来た。だが見ていて一番つらいのは、親たちだった。ラベンダー・ブラウンの母親は夫とともに到着して数秒ともたず泣き崩れ、慰めるのに慣れたマクゴナガルに連れられて去っていった。 コリン・クリービーの父親は震え、そのとなりの弟のデニス（といっても、もはやあまり幼くはない。他の人たちと同様、戦争で成長させられたのだ、とハーマイオニーは思った）はいまにも倒れそうに見えた。

ハーマイオニーはなにか言って、いや、してあげたかったが、今回は、やりかたが分からなかった。 本には書かれていない。 羊皮紙に印刷された手順はない。 これはO．W．L．でもN．E．W．T．でもなく、現実の人生の試練だ。

後ろのほうで花火が上がった――だれかがどこかで、共通の敵の死を祝っている。共通の友の死を悼むことを知らずに。 そう思うと、ハーマイオニーの身体が痛んだ。

ハリーは最後に来た。 ゆっくりと神経質そうに歩く姿は、来たくなかったと言って

いるように見えた。　自分のためにだれも死なせたくないと、彼は何度も言っていた。なのにこれほど多くの命が失われた。　そのことで痛みと、自己嫌悪とを感じているに違いない。　彼女自身もそうだった。　ホークラックスのことをもっと早く知り見つけられれば、死んでいった人たちを守れていれば、全員を救う方法を見つけられていれば、と自分を責めた。

ハリーの視線を受けて、彼女は元気づけるような笑みをしようとしたが、失敗した。その気力も感情も残っていない。　彼なら分かってくれるだろうと思った――おそらく同じように感じているだろうから。　最終決戦の後、彼は記者たちに付けまわされたが、インタビューをすべて断った。　おなじ立ち場であれば、ハーマイオニー自身もまったくおなじようにしただろう。

ハリーが前列中央に出て話しだすのを、ハーマイオニーは見つめた。　大きな声ではなかったが、草地全体に響いた。　「みんな、集まってくれてありがとう」と言うその声には、傷があった。　今までの声ではなかった。　「ここに集まったのは、ホグワーツの戦いで亡くなった人たちを追悼するためだ。勇敢に戦った彼らの犠牲は……無駄じゃなかった。彼らのことをぼくたちは決して忘れない」

彼は死んだ人たちの名前を声にだして挙げ、それぞれの貢献と戦いぶりを紹介していった。　普通であれば何らかの原稿かプロンプターが必要なところだろうが、ハリー

には必要なかった。　どの人のことも、日曜のつぎに月曜が来ることのように、一週間が七日であることのように、よく知っていた。　ハーマイオニーもおなじようによく知っていた。彼女はハリーにあわせて、声にださずに彼らの名前を言った。自分の夢に出つづける彼らの名前を。

その途中で雨が降りだしたが、だれも避けようとしなかった。　ハリーは止まりもしなかった。　全員がいっしょに、ピースが欠けすぎて完成できない、けれどもぼんやりと判別はつくようなパズルになって、立ちつづけた。　テディ・ルーピンが泣きだし、悲嘆の合唱に加わった。

それが終わると、ハリーは集まった人たちを無言で見渡した。　ハーマイオニーもそうした。　彼らの色を失った顔とつらそうな目には、どこか安心させられた――自分だけがそうではないのだ、と。　ハーマイオニーは道ゆく人が見せるくつろいだ笑みに耐えられず、魔法界で出歩くことをやめていた。　ここでは、同じような痛ましさを経験した人たちといっしょにいられるような気がした。

ハリーがひとつめの石のかけらを置いた。　参列者がひとりずつ石を積み重ねていってできる土台のうえに、犠牲者と遺族のための記念碑が建てられることになっている。　その碑は死の埋め合わせであり、さまよう魂のための入り口だ。

ハーマイオニーの石は根本近くになった。

一時間後、彼女だけが残った。　ロンは彼女を隠れ穴へと連れて帰ろうとして、モリーの熱いスープがあると言って誘ってくれたが、彼女が行けないことも理解してくれていた。

もつれた巻き毛から、雨が滴る。彼女は目の前の石の山をじっと見た。　自分にとっては、むしろ星々のほうが意味がある、と思いながら見上げると、なめらかな夜のとばりに織りこまれた魂のダイアモンドたちが広がっていた。

「Ｓｉｃ　ｉｔｕｒ　ａｄ　ａｓｔｒａ（シーク・イートゥル・アド・アストラ）」と彼女はささやいた。　――『かくて人は、星へ』。

氷柱 ／ Icicles by nymphxdora

彼女は暗いなか、ひとりで座って、待っていた。

テディは上の部屋にいる。　ニンファドーラがあの子を預けに来て、しばらく面倒を見てほしい、なにがあってもあの子を守ってほしい、と言って出ていってから、何時間も経った。

「お母さん……もしわたしが戻らなかったら……この子を……育てて。　健康に、強く育つように。　そしてわたしのことを、わ――忘れないように」　その声は涙でいっぱいで、感情そのものが滲んでいた。顔色は真っ白で、髪はいつもの活力を失っていた。

昔からいつも、あの子は……最初はやんちゃな子どもとして、後には正式な闇祓いとして、さらには騎士団のメンバーとして……あらゆる危険に首を突っこんできた。　だが、あれほどなにかを恐れるニンファドーラを見たことはなかった。

アンドロメダはテディを寝かせるため、揺すってやりながら子守歌を聞かせた。両親は彼を愛していると、起きたら戻ってきてくれると、言って聞かせた。　それが嘘にならなければいいと願うしかなかった。

静寂のなかで小枝が折れる音がして、彼女は戦慄した（ニンファドーラとリーマスが勝利して、無事に戻ってきたのだ、という一縷の望みも浮かぶが、無視しようとした）。杖を手に、彼女は警戒しつつ立ちあがり、窓のほうへ向かった。

木々のあいだの、やっと見えるかどうかの白いきらめきをアンドロメダの目は逃さなかった。　震えながら、窓を開けて問いただすと、声が反響する。

「だれ？」

人影が森から、両手をあげて出てくる。

「わたしよ、アンディ」

人影は近づいてきて、女性のすがたをしていることがはっきりと見てとれるようになった。長い首、ブロンドの長い髪、高い頬骨。だれであるかは即座に分かった。アンドロメダはほとんど衝動的に杖を、動く人影の胸部に向けた。

「止まりなさい、ナルシッサ」と小声で詰問調になる。

「攻撃するつもりはないわ」

そう言ってナルシッサは杖をポケットから出し、地面に落とした。信頼のサインだ。

「アンディ、もう終わったの。あの人は死んだ。ヴォルデモートは死んだ」

アンドロメダの心臓が一瞬止まった。　戦争が終わった。勝利したのか。　心のかたすみの一縷の望みでしかなかった、ニンファドーラとリーマスが戻ってくる可能性

が、ほとんど確実なように思えてきた。

だがナルシッサからもたらされたその喜びも、アンドロメダの疑念を止めはしなかった。

「もし騎士団の側が勝ったなら、なぜあなたがここに？　あなたの家族の……交遊範囲からすれば、アズカバン行きか、少なくとも裁判があるまで拘留されると思っていたけれど」

杖は、ナルシッサの胸に当てたまま。

ナルシッサは悔恨の笑みをした。

「わたしは……乗り換えた、と言えばいいかしら？　少し説明しにくいのだけれど……」

アンドロメダは、いくら難しかろうが知ったことか、納得いくまで説明してもらうまでは信頼してやれるわけがない、という表情をした。　ナルシッサは驚いた様子を見せず、溜息をついて、続けた。　長女はこの三姉妹のうちで、いつも一番頑固だった。

「闇の帝王はハリーを殺した。ところが、実はハリーは死んでいなかった。　あの人はもちろん、そうとは気づかなかった――わたしがそれを確認させられたの。　わたしはハリーに――もちろんこっそりと――ドラコが生きているのか、尋ねた。　最後に聞いたときには、城のなかにいるはずだったから。　ハリーはうなづいた。　わたしは闇の帝王に、ハリーはたしかに死んでいる、と伝えた」

アンドロメダはその情報を慎重に受け止めた。

「ずいぶん勇気がいったでしょうね、シシー」

ナルシッサの顔にかすかに笑みが現れたが、すぐに消えた。

「でもそれを言いに来たわけじゃない」

「じゃあ、何のため?」

「アンドロメダ……」

ナルシッサが迷いの表情になった。　アンドロメダは心臓が胸骨を打ち、骨に傷を残すのを感じた。　開心術士ではなくとも、なにかがどうしようもなくおかしいときに、本能的に気づくくらいのことはできる。

「ニンファドーラが、死んだ」

その数語を胸に投げつけられ、アンドロメダはよろめいて倒れかけた。指が折れるかと思うほど強く窓枠を握ってとどまった。　涙が目の端から滲んだが、泣きはしなかった――凍りついて氷の結晶になった涙が、寒気を全身に伝えるようだった。　なにか言おうとしたが、声が出ない――のども凍りついた。その表面についた透明な氷で、言葉が通れなくなってしまった。かすかに胃が痙攣しはじめたのに気づいた。これから痛みが少しずつ、少しずつ積み重なり、息もできないほどの苦悶に変わる。

けれど、テディのために、聞いておかなければ。そう思って何とか言葉を紡ぎ出した。

「リ、リーマスは？　あの子の夫は？」
　ナルシッサは首を振り、アンドロメダは唇を強く噛み、血を吸った。　これで皆いなくなった。テッド、ニンフィ、リーマス……。テディだけが……可哀想に一カ月にもならないうちに、テディだけが残って、孤児になってしまった。　この子は両親を知らずに育つ。気分によって色を変えるニンフィの髪も、リーマスの静かで知的な雰囲気も、
　二人がどれだけ勇敢だったかも知らずに。
「アンドロメダ。さぞつらいことだとは思うけれど……」
「つらいに決まってるでしょうが」
　歯ぎしりをしながら彼女はそう言った。
「だれ？　だれに殺されたの？」
　ナルシッサは息を飲み、喉になにかをつかえさせた。
「アンディ、……ニンファドーラは、ホグワーツの門をくぐった直後から、狙われていた」
「だれなの、ナルシッサ？」
「ベラ。ベラトリックスよ、ニンファドーラを殺したのは。リーマスを殺したのは、ドロホフ」
　アンドロメダは凍りついた。　空気が冷たい。とても冷たい。
「し――知っていながら？」

ナルシッサはうなづき、アンドロメダは突然怒りが全身を巡るのを感じた。　当然……ベラトリックスは当然、ニンファドーラがアンドロメダの娘であることを知っていた……　ニンファドーラを獲物として狙って殺したのは、何年もまえにアンドロメダがしたことへの仕返しなのだ。

「アンディ……ごめんなさい」

「黙って、シシー」と言う彼女の声は震え、悲しみと怒りが混ざった。

彼女はナルシッサの謝罪を許せない。　いつもそうだった。　彼女がテッドと付き合っているのをナルシッサが知って、両親に伝えて、あっさりと家から彼女を追い出したときのことを思い出す。　その一週間後に謝罪しに訪ねて来たナルシッサに、穢れた血と結婚したとしても姉妹として愛していると言われたときのことを思い出す。　アンドロメダはあのとき、取り合おうとしなかった。

「く……苦しまずに死んだ?」

ナルシッサの表情から、そうでないことは分かった。ベラトリックスはニンファドーラが苦痛と恐怖で悲鳴を上げるまで拷問したのだろうということも、　妻を救いに駆けつけたリーマスが返り討ちにされたのだろうということも、分かった。　もしニンファドーラがそのリーマスを見ていたら、クルシアタスの呪いと苦痛とがいっしょになって、忍耐の限界を越えてしまっただろう。そして、普段は不屈で勇敢なあの子も、地面

に倒れただろう。
「ベラトリックスを殺してやる」
彼女は自分でも驚くほど険のある声で言った。
「どうなっても殺す。必ず殺してやる」
「もう死んだわ。モリー・ウィーズリーが殺した」
二人は沈黙した。声のない嘆きが空気を重くした。
「わたしは……ニンファドーラをよく知らなかった」とナルシッサが静かに言った。
「そうね」
彼女は実家の人間をだれ一人あの子に近づけようとしなかった。近づきたがる人間がいるとも思わなかった。
「ニンファドーラは……あなたとよく似ていた。それにあなたのように……勇敢だった。アンディ、彼女は最後まで戦っていたわ」
「わたしなんかより、はるかに勇敢だった」
そう言いながらアンドロメダは自分を嫌悪した。彼女は不死鳥の騎士団への参加を見送った。迫りくる闇から自分と家族を守る機会を見送った。家族を危険に晒したくないから、と自分に言い聞かせていたが、本当は恐かったのだ。
その恐れのおかげで、娘は死んだ。孫は孤児になった。

こんな自分に我慢ができない。

「去りなさい、ナルシッサ」

「でも、アンディ、わたしは……」

「早く」

ナルシッサは最後に同情するような眼差しをしてから、バチンという音とともに空中に消えた。　アンドロメダはいつのまにか壁に寄りかかって崩れ落ち、やっと涙に身を任せた。